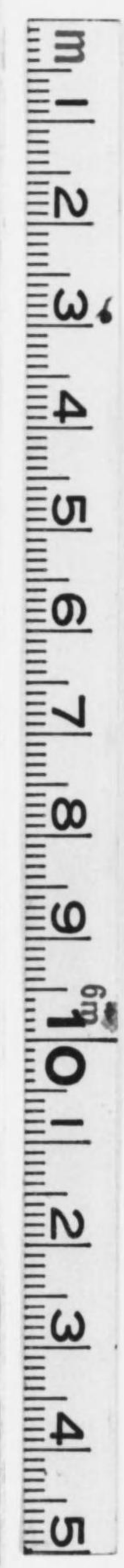


585
納本

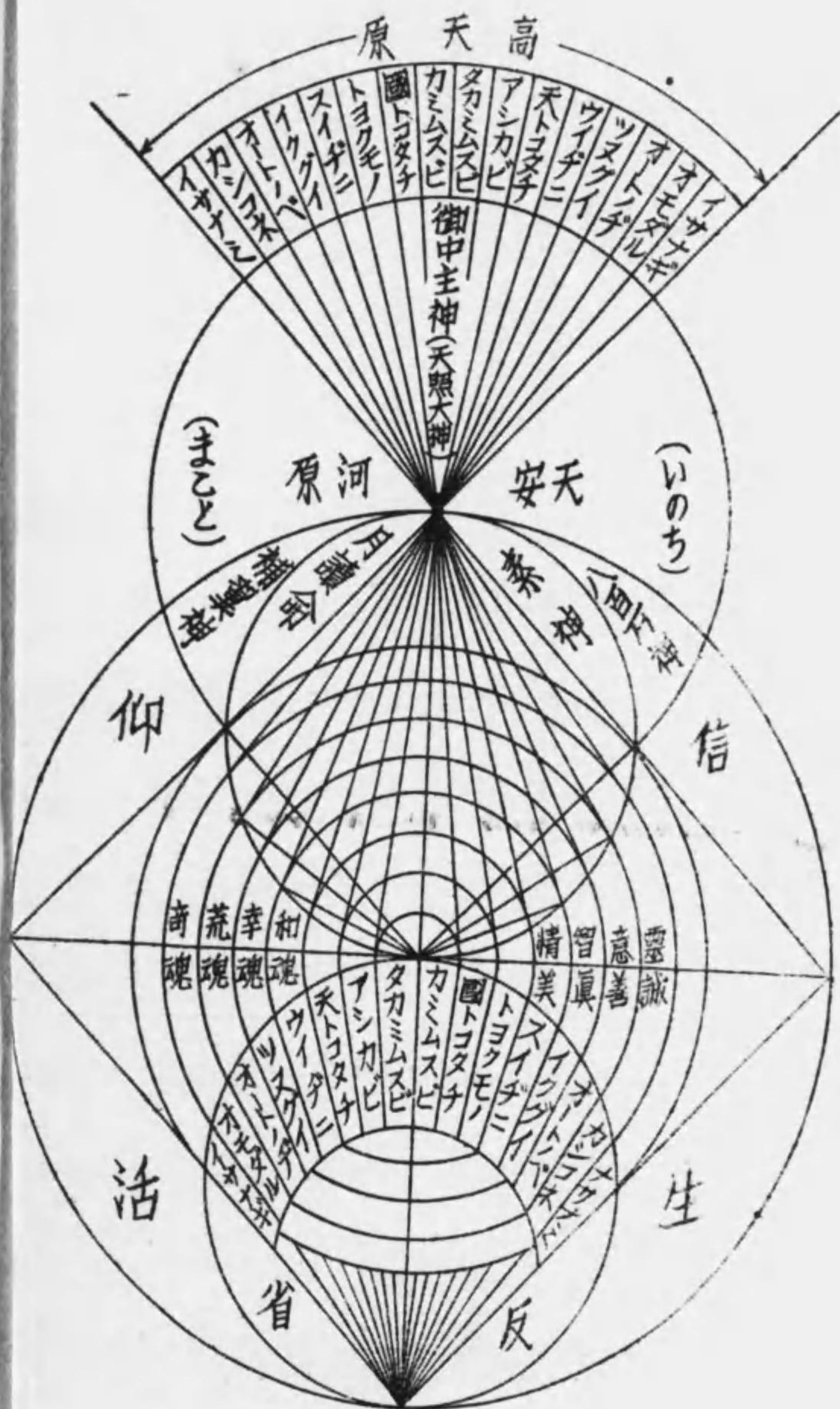
高天原の信仰

特253
55



始
←

特253
55



一 高天原と魂の世界

茲に信仰生活の圖解について説明を試み高天原の觀念を明らかにしたいと思ひます。そこで上方區劃が高天原である。故に御中主神より諸冊二神迄の神々を列記する。而して御中主神は其中央に立たされ、以下の神々はムスビを司り給ふ信念のもとに、中央より左右にふり分け陰陽に見奉るのである。次に天照大神は高天原の一切を代表され、高天原の交點に立ち給ひ、同時に御中主神の延長上に立ち給ふのであります。又中ツ國を直接御導き給ふ最高主宰の神として中ツ國の頂上点に居られます。次に素神、月讀命、補翼神、八百万神は信仰の上の神々にして、高天原の中ではないけれども天照大神と共に天安河原に神集ひ給ふ關係を圖示します。之は諸神が天照大神を高天原の統治に任し給はれたること、及び天岩戸開きや、參上りのことを圖にあらはしたものである。そこで高天原の神々の御働きが中ツ國に反映するためには、天照大神を通してくるので、恰も寫眞器のレンズに當ります。圖に於て見る如く放射線が中ツ國に現はれるとき左右反對となります。即ち日本の神典は其ままでは理解し難い。



そこで中ツ國の上半部の圓弧は高天原の神々の御働きが直角的に正射する處の乾板である。之を立體的に考ふれば球面になる。恰も眼球の如くなる。此面に現はれる立体画面が高天原を表現する現象界である。次に下方の圓弧が吾人の感受する處の現象界で、いはゆる心の鏡に映するものである。故に眞實の自然現象は第一現象であり、人間の心に映するものは第二現象である。即ち現實界といふのが正副二様の觀察より成立つて居る。故に神が實在であらせられ、其眞實の現象が神の投影であり、心にうつる現象は更に其投影であるを悟るのである。故に三段に降りてくる。そこで天地人の三界に區分されるのである。斯様に第一現象と第二現象と同一でない。恰も鏡によつて自分の顔や後姿を知り得らるる如く、實際のものがつかめないものであるから、等しくはあつても同じといふことはない。然るに人間各個の特性により、其認識する處は皆相違するものと解される。卑近な例について

一、色盲者と普通のものと同一物に對して其色が違ふ。

二、近視や遠視のものと正視者とが見る大きさ長さは同一でない。

三、お互ひ暑さ寒さの挨拶を毎日して居るけれ共、其度合は一致したものでない。

四、自分一個に附いても、健康に異状があれば一切の感受が違つてくる。

以上は極端の比較のよふであるけれ共、同一條件の人間は居ない。そこで同一事物に對して自分と他人との間にはあらゆる自然現象の認識に誤差がある。

茲に更に例を曳いて考ふるに一尺の長さは誰が見ても一尺だといふ。精確を期するために指尺で測れば一尺に相違ない。然し其單位になる長さの、之位だといふ基本認識が違へば、ある長さ例へは二尺の長さを測つて見て、其標準に對する二倍といふ比例は同じでも基本の相違は何處迄も影響する。之を時間の例で考へれば最もよくわかる。即ち同一の時間が二人の間に於て健康や趣味や優劣の相異により、同一時間が長くもあり短くもある。そこですべてのことに比例の認識は等量でも、基本認識の相違する理由は第一現象と第二現象の區別あるためと知るのである。

かくの如く現實界は自分の世界ではなくて、神の世界を鏡にうつして悟らして貰ふて居るに過ぎない。實際問題としては左程大した差支へはないよふであるけれ共、靜かに内觀すれば人生の基礎問題である。日本の神様は神自身の立場より出現し給ふたと信するとき、そこに眞實の絶對がある。然るとき自然界を神の方より觀察すれば正像

で、人間の方より見たとき副像である。正副双方を見たとき參上りと天下りである。之が日本神話の基本であつて神の世界には情實や罪惡はないけれ共、人間が宇宙を征服すると考へたら自分の世界に執著が起つて、そこに暗黒世界が展開すると解される。吾人は五十年の内の或期間をこらへて永遠の状態の如く考へやすい。自分の變遷といふものに氣が付ない。故に自分を土台として相手の方のみに、かれこれ要求がましくある。故にお互の觀念に絶對も相對も入り乱れて來る。

扱て自分は現在生きて居る。そして周囲の天地自然に接して居る。然し乍ら死又は睡眠によつて意識がなくなれば第二現象は消滅するけれ共、第一現象界は惟然として永遠に存続するだろふと思ふとき、自分といふものの認むる現實界は自分の占有に屬するものでないことを知る。即ち人生は始めなく終りなき神の生命の流れに織り込まれた、恰も糸一筋の中の結び目に當ると考へられる。又神の無限大なる姿の中に大海の一波にすぎざる存在と悟るのである。即ち自分は糸其ものでなく、又水其ものでなきことを知れば、實質に非ずして現象たといふことができる。此觀念を宇宙の全体に推し擴めるとき、吾人の認識の總てが現象であつて實在でない。故に第二現象界に於て

一つの變化を見つたつあつて實在を捉へることができぬ。此捉へ得ざる永遠の存在である處の絶對の世界が高天原であつて、其實在が神であらせられる。故に實在を捉へ得ざる自分の心は一つの鏡であるときさるのである。此自分を土台として世の中を見ることを自分本位といふ。更に第二現象のみを土台とする見方を氣分本位といふ。例へば夢を見て本當だと思ひ込むものは第二現象妄者である。失戀や迷信も之に類する。そこで第一現象界の反省があれば、幽靈の正體見たり枯尾花となり普通の見方である。更に桐の一片に天下の秋を知り、海水の一滴で全部の鹽辛きを知るのが悟りの見方である。更に自分も現象界の一部分だと知つたとき神の信仰が起る。次の名訓がある。言簡にしに無限の理を含む。(醫學博士森田正馬先生)

○ 夢中の有無は有無共に無なり。

○ 迷中の是非は是非共に非なり。

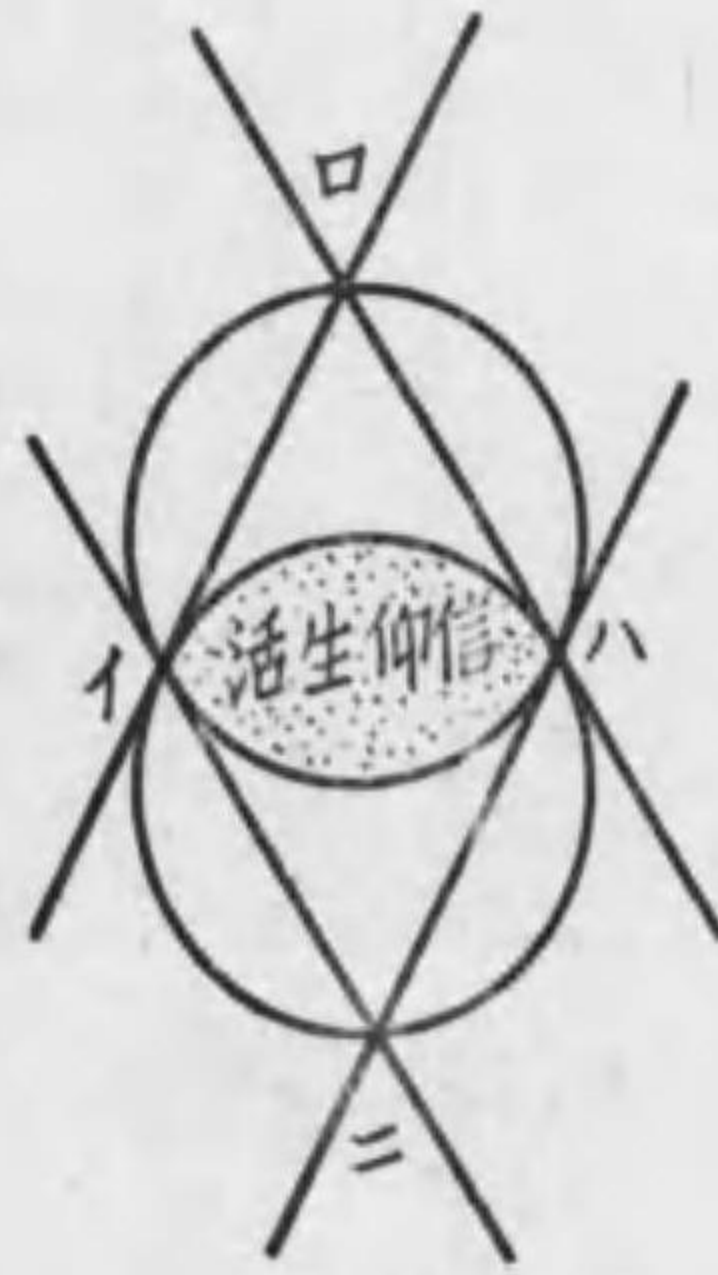
そこで高天原は平等不變であり、宇宙の全一より見られる。現象界は差別變化であり、宇宙の中心より見られる。其間に中道として眞實をつかんで世に處して行くところに中ッ國が生れて來ます。古事記の中に大國主命が谷くぐと久延毘古によつて悟りを

得られます。谷くぐりはがまのことであり、久延毘古は山田の案山子のことなりといふ
 である。即ち神産靈神の御子少名彦神が小さい身体に蛾の羽根を付けて天の鏡舟に乗
 つて海上遙かに出雲の國にやつて來られる。大國主命がごなた様かと尋ねられると答
 へられない。そこに谷くぐりが來て久延比古が知つて居ると教へる。久延比古に尋ねれ
 ば少名彦神であると教へる。そこで神産靈神にお伺ひすれば、中ッ國を兄弟となりて
 共々に國造り固めよと仰せられた。この一條によるに谷くぐりは無窮生命を表現した卵
 生の動物である。其卵は見事な一條の生命の連がりである。又案山子は笠を著て足が
 ない。則ち天に昇らず地に付かず、然も靜かに立つて天下を見守つて、天が下の事を
 悉く知つて居るといふ中道の正覺を得られたもので無窮生命と中道とは中ッ國の本質
 と窺はれます。そこで中ッ國といふことは單純な日本の國土の意に止らず、神の世界
 信仰の世界であります。此關係を圖解すれば、第一圖は無神論の世界、第二圖は稍々
 信仰の進んだ世界、第三圖が完全に中道の結ばれた世界であると解されるのである。

第一圖



第二圖



第三圖



とにかく吾人の認識は眞實のものに觸れることが不可能であるといふことが、吾人の心は鏡の如くであるといふに飯するので、日本神話の基本には他の宗教科學總ての方面と全然立場が相違して居つて、實に深遠なる理がふくまれて居ります。書紀の一節に、天照大神御手に寶鏡をもち給ひ天忍穗耳尊に授けて曰く、此寶鏡を視まさむことまさに吾を視る如くすへし。與に床を同ふし殿を共にし以て齋鏡となすへし、とありますことに付て、吾々臣民にも御訓へとして捧戴しまするとき、鏡は自分の身から離れたものでないのであつて、心が鏡といふことを悟るのである。即ち眞理は自分のものでなくて向ふにある。之を心に寫して見るのであります。斯くの如き深理の上に神の絶對がある。神國日本の眞の姿といふものは人間本位の見方では全く了解できない處であります。かよふに第一第二の現象界に判然と區分すれば、第二次界は物の世界となり、第一次界は魂の世界となります。現代語に認識の相違といふことがあるのは此間の事情を説明せるものであつて、眞實と認識とが一致せぬことである。此事が神話の一部に物語られてある。即ち天若彦が高天原の使者として中ツ國の情勢視察に下つた。そして下照姫を妻として遂に反逆を起して高天原の服命をなさす、却

つて天の羽々矢の返し矢に當つて死した。此時下照姫の嘆きは非常なもので、其泣聲が高天原に達した。そこで若彦の父なる天津國玉神及び其妻子がこの國土に降りて來られた、そして天上に連れ飯つて喪屋をつくり、八日八夜弔ひをされた。其時若彦の善き友、高彦根神がお出になつて弔ひ給ふたる處、其容貌がよく似て居たので、妻子達が之を取違へてとりすがり、若彦はまだ死んで居ないと喜んだのを、高彦根神は大いに怒つて十束の劍を以て喪屋を切り倒して逐け歸られた。其喪屋は美濃の國に落ちて山となつた。之を喪山といふ。此高彦根神の御名を現さむと、妹神の高姫命が歌にされた。茲にまぎらほしいことは下照姫と高姫命は異名全神とある

天なるや おと棚織の うながせる

玉の御統 御統に あなだまはや

みたにふたわらす あぢしき 高彦根の神ぞや

此歌意は天上の美しい機織女の頸にかけた御統の玉が美しく輝くよふに、谷二つに涉つて照りかがやき給ふ神は高彦根神である。斯様な意味と申します。即高彦根神は神の眞實を現はして居られるが、若彦は似て非なるものである。かく總てのものに付い

て神の生命を自覺するか、個人生命を自覺するかが大なる分岐点である。この心を鏡とされたる点は皇道の他教に一頭地を抜きたるもので、同日の談にあらず。禪では見性成佛といふ。即ち吾も悟れば佛なりといふ譯で自分が其儘佛である。淨土では彌陀の本願といひ、ひたすら佛にすがつて往生成佛するといふ。日蓮では觀心本尊と申されて、心の中に本尊があるといふ。即ち人間は夫々佛性をもつたものであるから、つまり人間が佛になり得るとされる。然し日本神話の精神を反省するとき、神は第七感の上であり、直接の心ではまだまだ眞の神にふれたものとも考へられない。高天原は更に一段高い所にあると考へられます。故に眞實の神を拜むまでに魂の世界を發見せねばならぬのである。然るとき第七感で神は實在たらせ給ふことになりま

す。つまり觀心本尊といふことに類する。此理は圖の上にも見えます如く、内省に於ける神々を現象界を通して見るとき、最初にあらはれ給ふのが天御中主神であらせられる。其内省の端緒が蘆の芽の如く、又卵の胚芽の如く、生命の牙があらゆる相對を超越して、只一つの光明として拜まれるのである。その輝きは火の玉であつて、廻轉が螺線型に大きくなつてゆく。そこに現象界のムスヒをささると共に陰陽の相對があ

らはれて、高産靈、神産靈の二神となり、ついで相對絶對の觀念の上に天常立、國常立の二神となり、續いて情の世界が展開され、智の世界が展開され、意の世界が展開され、更に魂はこの三つを統一して外界に交渉を推し進めることになる。そこに男女十柱五組の神を拜むのである。然るとき自己の内省は恰も太陽の光明を七色に分解したる如くである。ついで高天原の一切が天照大神に代表されますことは、七色の分解が再びもこの一色に合成されて生命の内容が(まこと)となるのである。日本書記の初めに古へ未だ天地別れず陰陽分れるとき、渾沌たること卵(とりのこ)の如く、くぐもりて牙(きざし)を含めりとあることが、内省の緒を説明されたことであり、魂を卵の構造に例へられたるものと解釋されます。故に神代といふことが第六感の上で魂の世界といふことであり、靈も魂も一つの生きたる玉である故に曲玉は是をつないで無窮生命を表徴されます。又出雲風土記には神産靈神を神魂神と書かれて魂をむすびと讀ましてある。そこで和荒幸奇の四魂は神靈の働きである。

次に大國主命は中ツ國の御經營に於て出雲の國の海邊で幸魂寄魂を授かられます。即ち少名彥神は淡島にて粟の莖に登り彈かれて他界されましたが、魂となつて再び出雲

に來られます。書記の一節に神光海を照し忽然浮ひ來るものあり。曰く吾は是れ汝が幸魂奇魂なりとある。即ち人間の一生に付いて考へましても、少年時代に於て情に強いことが和魂の發露であり、中年時代に意につよいことが荒魂の生長であり、老年に及ひて理智に長けて人間を完成するといふのが幸魂奇魂を授けられることに外ならぬと解されます。そこで魂の完成する順序から考へまして、御中主神以下の神々はそれそれ魂の世界に御働きを表現し給ふのである。故に吾人は直接には神を拜むことができないが、鏡にかけて魂の世界を見出すとき、同時に天照大神の信仰に歸著するのである。素神は諸神より此地上の統治に任せられました。只母神のみを慕はれたといふことが、純情の發露で和魂であつた。そこで和魂の證明ができて一應は高天原入りを許されます。然し遂には色々の乱暴をなされたといふことが、反省なき勇で荒魂を抑へることができない。則ち中年時代の勇を説明されてあります。そこで高天原から再ひ下界することになつた。然し八頭の大蛇を退治して宝劍を得られたことは偉大な効果であります。然し中ツ國を完成する資格は、大國主命に及んで幸串の二魂を得られました結果に基くことで、之によつて始めて荒魂の眞價が生れて來ます。此魂の

全部が天照大神のまことであつて、無限の光明であります。各自が佛性をもつて居るといふ原理と對照して神話の尊嚴の前には自つとひれ伏す感が致します。

かく比較して見ますとき、他教の信仰は飴玉信心で甘くて入りやすいが、皇道はコンクリート信仰と申すへきかと考へます。つまり自己を土臺とすることは、自分の心を信するのであるから信心である。然るに皇道は慈愛仁の如き至情のみでなくて全部に備はつて居る。即ち單調に自分の心を信するにあらず、眞神を拜み奉る處の本當の信仰である。そしてセメントと砂と砂利と三つの材料がコンクリートとなつた結果は何れも材料よりも更に強硬なる魂の完成であります。故に大和魂は神のものであります。中ツ國に天孫の御降臨なし給ふための御用意であつたものと信します。そこで魂の世界は神の投影であるから其もともとの實在たらせ給ふ高天原の神々を第七感の上信仰する。佛教では心を鏡と見て居ない。各人個々に成佛する。つまり個々の佛が寄り集つて淨土を建設するといふ下より上への教である。故に人間を基としたる宇宙觀であつて、最初が娑婆世界である。然るに日本は初めに中ツ國ができて、人間は神の營みの内にあり、心は鏡として持たしてある。即ち反省によつて神に皈一するにあ

り、準備は向ふにできて居る。故に皇道信仰は上より下への道である。そこで淨土も中ツ國も同じ世界であると申される。そこで日本は神の國で人間が初めから統一されてあるけれ共、外來思想は單位の獨立が認められて居る故に是から統一を形成せむとする永遠の奴力である。そこに天地の相異がある。石川琢木の歌に一握の砂がある。

○一握の砂のいのちのかなしさよ、つかめは指の間より落つ。

即ち個人主義には國家生命、宇宙生命を發現せぬ。然るに日本精神には握り飯の如き固き結合力がある。然も中には梅干一つの光明があつて、億兆心を一にしたる無窮生命が存する。

○日の本の神のむすひの雄々しさよ、心一つにつくり固めし。

故に國體明徴は各人の自覺である。生の米では握り飯とならぬ如く、肇國の原理といふ一つ釜の御飯となつて自つからなる相互の結合が神乍らなる姿と考へます。かくして何れの信仰も自由と雖も、飯著すへき處は皇道信仰であつて、拍手合掌何れにても可なり。寢てもさめても此信仰に徹底するとき、感謝の實生活である。

吾々は死に行く先きを決して思ひ煩らふてはならぬ。導きの儘である。然し何處かに行きたいと思ふ念願があつたならば、神のまごころを信じ道徳實踐に努力せよ。然るとき天安河原行きに相違ない。そして祖先と共に安の河原で神の直接なる御聲を聞くであらふ。斯くの如く神は吾念頭に命し給ふ。

二 日本神話と日蓮上人

茲に日蓮上人の御精神を聊か戴きまして神話の反省に資したいと考へます。もとより法華經の側面觀でありますから、當らざる点は改めねはなりません。上人は佛典の内法華經が最上のものでして、南無妙法蓮華經を創始された。即ち釋尊の眞實の精神は此中に打込まれてあつて、其餘の一切經には未だ眞實を顯現せずと申されて、後の八年間に説かれたる法華經の専らなる行者となられた。法華經が末法の世に於て實現するといふ事は釋尊の予言であつて、正法千年次に像法千年の間は人間の機根がよろしい故に、方便の教でもよいけれ共、佛滅后二千五百年を経れば眞理を説いた處の法華

經が世界にあまねく擴まる。即ち方便を捨て但無上道を説くごあります如く、法華經は絶對である。法華經に過ぎたるものはない。故に他の一切經は空にある星の如く、法華經は太陽の如くであると申されてあります。然しそれには非常な困難があるが、法華經でなければならぬといふことは、人智が開けて釋尊の方便を信しなくなる。故にむつかしい理論でも眞實を流布せねばならぬといふ理想を、日蓮上人が自ら引受けて立たれたのであります。おことばの内に極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一日に劣るか、是はひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず、時の然らしむるのみとありまして、末法の世の悦ひと共に困難に打ち勝つて行く決心を固めて居られます。神乍ら道も同様であつてことあげせぬのが原則でありまして、亦止むを得ぬことと存します。

そこで上人は觀心本尊といふことを申されまして佛を明らかにされて居ます。本尊とは吾人の信仰對象をいふ。各宗によつて違ふので、眞言では大日如來、淨土では阿彌陀佛、日蓮では妙法蓮華經である。そこで觀心によつて本尊が定まる。即ち自分の心の中に本尊を拜むのたとされます。其本尊は久遠の本佛であつて、つまり宇宙の絶對

眞理と解されます。人間は各自に佛性をもつたもので、此眞理を體得すれば佛になるといふことであり、その眞理を説いたものが法華經である。其本佛に一致して佛となることを蓮の花にたとへてある。蓮の花は散らない内に實を結んで居る。凡夫の吾々も釋尊の教へに精進すれば、次第と佛の境界に近づいて、死ぬ時には立派に成佛する。其絶對眞理が妙法である。南無は歸依する、敬い頼るの意で南無妙法蓮華經は絶對眞理を信奉する心持を稱へた言葉であり、信仰である。つまり佛よりも法がもとになるといふことである。皇道は 天皇陛下万歳、大日本帝國彌榮の奉唱であります。そこで蓮の花を何故に特に選ばれたかといふに、印度では蓮が尤も崇高なる花の由であります。印度は日本の如き山川の美がなく、草の花はトゲあるもの多く美觀のものが少ない。尙又何處の水も泥溜りで不潔である。其多くの花の内蓮の花のみが泥中にきれいなことは不思議な程で、且つ赤紫黄白の四種に咲いて、日本では想像のできな美觀といふことであります。故に佛の大慈悲を表現した譯であります。日本では日本精神を櫻の花にたとへてある。一つ一つの花は小さいが、其集團的美觀及び花の散り行く有様が、眞によく日本精神を表徴して居ると思はれる。

○ 敷島の大和心を人間はば、朝日に匂ふ山櫻花。

日本神話の精神を反省したる後に於て、其歌の意味に絶大の讚嘆が湧き出ます。故に何れの國土にも天地の自然に信仰を導く處の、神の心が現はれて居ることは有難いこととであります。

次に觀心が主か本尊が主かといふことが考へられますが、之は全時たと解せねばならぬ。即ち吾人の心の中に佛性ありと氣付いたならば、そこに本佛の絶對力があらはれて居ると悟る。此点は佛教が短刀直入である。然るに皇道は心の中に魂を見出す。即ち四魂の關係と更に生命の牙が獨樂の中心の如く、動中靜の形相で成立つて居る。それは神の御力である。そこで魂を見ることによつて、肇國の原理が妙法である。か様に觀心悟魂眞神といふ三段になるのであつて、本尊は天照大神である。故に大和魂は吾人の心の別名と解するは早合点にして、大いに反省を要するところである。

茲に心に映するままの世界は地であり、魂を悟つた世界が人であり、神を信する世界が天である。之を樹木の生長する状態に比すれば、(地)は根の張る處であるから根の國といひ、物の世界である。(人)は樹木の榮ゆる處で彌榮の國、生命の延ひる世界で

ある。(天)は樹木に生命を與へる處で、光明世界高天の原である。故に心魂神といふのがそれそれ天地人三界の本質を表現したるものといふべく、三界が一体となつた處が宇宙の實相、總体的なる神の世界にして常に神代である。然るに科學は之を自分の世界とするのである。故に其觀方が違ふ。かく立脚点が違つて居たならば古事記の解釋は要するに目くらのかきのぞきになる。則ち宇宙の中心と全體との關係が、つまり自分と神との關係になることを暗示されて居る處である。そこで三界は別々になり立つたものでなくして、互ひに依存したる現實界なのであつて、其中心をさらえたるとき中ツ國となるのである。かよふに反省を進めて見れば、神代といふ時代は現在が其まゝ神代たるものにして、然かも神の世界は始めなく終りなき故に、太古に逆のほつて見ても眞實であり、又將來に向つても眞實である。而して天照大神の無量無邊の壽徳は、時間空間何れの方向に向つても、各三界に遍滿せるものであつて、中ツ國に對して天孫の御降臨は常に天照大神の御延長として仰がれるのであります。故に歴史の上の天孫降臨は日本民族と共に實現されてあつたに相違ないけれ共、有史以前のことは限りのないことで、科學で證明が付かない。只靈の世界から現實の世界に推移し

た中間に於て、史實と信仰と融合せる時代の神業であつて、年代を超越したる久遠の信仰であると斯様に解される。故に神話の傳説地は信仰の上より尊といのであつて、民族信仰の反省地たるべく、人間本位に考へられないのである。

次に上人はマンドラを作られて拜まれた。マンドラとは具足の意、完全に備はることでありまして、南無妙法蓮華經と中央に書かれ、其周圍に多宝釋迦佛諸菩薩聖賢の名が澤山に書かれてあります。之は十界を意味されたもので、地獄餓鬼畜生修羅人間天上、聲聞緣覺菩薩佛の境界で、之を六道四聖といふ。天台大師の一念三千の説に依れば、之等の十界は互ひに他を具したるものである。之を十界互具といひ、心の働きである。尙法華經の信仰は末法の世に於て日本より世界に廣まつて行く可きものといふ上人の御確信のもとに、マンドラの中に天照大神と八幡菩薩が添へられてあります。其マンドラは觀心本尊の理を現はされたもので、反省を基とされたことであります。即ち吾人の心を寫したる鏡として拜むと申されてゐる。然るとき十界互具の理により佛に歸依するといふのである。然し日本神話では心が其儘鏡である。天照大神は諸神の左眼より生れ給ふて居る。其他神々がそれぞれ御資格を表現して、身體の部分よ

り生れ給ふて居ること、及び心臟絶對觀に立つとき、自分の身體精神全部が宇宙の縮圖であり、皇道信仰の生きたるマンドラである。尙現代人にとつて有難いことは教育勅語といふ大聖典を戴いて居ることでもあります。

そこで日蓮上人がマントラを信仰對象とされたことは自分の心を拜むといふことである。自分の心を拜むと云へば妙に聞えるけれ共、心の内に本尊を拜むの意からなくなるのである。故に皇道に於ては心が鏡であるから、鏡が信仰對象となるのであつて、古事記には天照大神の御神勅に『此鏡は専ら我御魂として吾前を拜くが如く齋き奉り給ふへし』と仰せられあることが、茲に併せて拜察されるのであります。

次に攝受折伏といふことがある。攝受は慈悲の心を以て総てを包擁すること、折伏は悪いこと過まれることを懲戒することである。日蓮上人は他宗の過まれる点を大に折伏されました。皇道信仰の和魂は攝受到相當し、荒魂は折伏に當るかど考へます。故に日本精神は正義のためには荒魂を以て神の使命に仕へます。

次に沙羅の四見といふことがある。即ち沙羅樹の下で釋尊が御入滅になつた。其場所の解し方に四通りあるといふことである。沙羅樹といふは日本の檜に似た大きな木で、

何處から見ても同じよふに見える常緑樹で、印度で古來尊ばれたるものといふ。釋尊はクシナ城外パツダイ河畔の沙羅樹の林に夕日があつて、如何にも極樂を思はしめる崇嚴な林の内で、特に大きな二本の間を選まれて、八十歳の年二月十五日北枕にして夕日の入るのを眺めつつ夜半に入滅せられたのである。其四見は

一、土草石壁　二、金銀七寶　三、三世諸佛　四、不可思議

位のこと。

二、然るに信仰に目さめて見れば、實に由緒深く偲ばれて金銀宝石の如くに貴とい。

三、更に佛を信すれば釋尊の説かれた法によつて三世の諸佛が此土地から生れたものとして有難くなる。

四、更に信仰が進めば妙理が悟られ此土地が淨土となつて光明が拜まれる。

斯様の次第で日本でも天孫の御降臨しましたる高千穂の聖地は、日本の肇國といふ神話の信仰にもとつて、之を深く尊崇し永遠に世界的なる信仰を記念すべく顯彰せねばならぬことである。また沙羅樹の莊嚴に對して日本には富士の靈峯がある。然も

朝日に照り添ふ象徴は皇國の姿であります。

次に二處三會といふことがある。釋尊が靈鷲山で佛弟子達に教を説かれた。靈山は釋尊お氣入の處で常に出かけられたる處といふ。その時東方より多寶如來と十方世界より諸佛が其眞實を證明するために集まつて來られた。そして天空に多寶塔といふ空中の樓閣があらはれ、地上から釋尊も弟子達も其塔に引あけられ、釋尊と多寶佛と對座されて更に教を説かれる。其説教が終つた後に眞實を證明するために一齊に舌を出された。古來印度の最敬禮といふ。釋尊は特に大きな舌を出され、之が梵天迄届いた。之を廣長舌といふ。此証明が終つて再び地上で教を説かれた。故に地上の會合を靈山會といひ、寶塔の會合を虚空會といひ、二ヶ所で三回の集りであるから二處三會といふ。思ふに始め靈山の教は差別相對の教であり、寶塔の教は平等絶對の教であり、最後に地上で中道を説かれたるものと解します。そして多寶佛と釋尊の對座は智と理の證明である。即ち教は智の力である。然し智は理に基くことである故に、智と理は宇宙眞理の兩面にして茲に妙法が生れたのである。此ことは素神の參上りの一條に似て居る。然し神話に於ては神生みによつて、五道と三徳を神示し給ふてある。更に天岩

戸開きに於て民族共同の信仰が確立されてある。尙中道は諸神の中ッ瀬にて定め給へる處であり、更に大國主命の久延毘古によつて悟られたることによつて、中ッ國の準備が整ふて居る故に、神々共同の偉業になれる天壤無窮の國体原理である。

尙中道理論について考へられるのは、素神の御神格が大國主命に至つて完成されて居るといふことである。即ち素神が母神を慕はれたること、及び天安河原のうけひ(誓)は和魂の自然的發露であり、次いで八頭の大蛇退治は荒魂の發揮であるが、其以前の高天原の亂行は中年時代に於ける人生の欠陥を示されたもので、中ッ國統治の資格なきものとして神逐らい給はれた。然るに大國主命に及んで幸魂串魂を得られたことが神格完成の歸結にして、かくて中ッ國に天孫が始めて降臨し給ふたのである。人生の一代を通して反省するに、主として始めに無意識時代、次に意識時代、終りに目的を意識する時代といふよふに、三段に進むことが魂の順序であると解します。斯様に日本神話は實生活に即した教訓で、佛教の如く空漠たる理論に偏したるものでなく、實踐が主となつた道であると言首肯される。かくして世界を指導する實力は、下より上への教でなく、上より下への道だと悟ります。

三 日本神話と淨土眞宗

茲に淨土眞宗の精神を神話の反省資料として考へます。但曲解の点あるかと思ひます。其れ共、眞宗の研究が目的でなくて神話の反省が主であります。鸞上人は淨土眞宗を創始されましたが、其もとは法然上人の流れを汲まれたものである。淨土宗は他宗と違つて他力の教で、本尊は阿彌陀如求である。彌陀が未だ佛となれない前、菩薩として修業されたときに四十八の願を立てられた。その内に若し自分の名を稱へるものは必ず之を救ふといふ願がある。之を第十八の本願といふ。そこで法然の念佛と親鸞の念佛と如何に違ふかといふに、法然上人は彌陀を念し、其力によつて極樂に往生するといふのであり、親鸞上人は一度彌陀を念すれば、絶えず頼まぬまでも必ず救ふといふ彌陀のお心があるから、頼むための念佛でなくして有難いといふ感謝の念佛である。即ち絶対他力の念佛であります。とにかく末法の世になつて、かれこれ佛説を研究して見た處で、到底わかるものでないから一切の自力難行を捨て、只一心に佛に歸依するといふのでありますから、日蓮上人と反對の行き方である。然し其歸依

する本尊は何れも一致したものである。かよふに只頼む、ごに角任せるといふ主旨は皇道の言擧げせぬといふことに合致したものと思ひますが、人智の進むに従つて信賴するといふ心を起すことは易いけれ共、其信心決定か困難である。

さて日本神話を反省しますれば、宇宙は神々の御計画があつて人間に使命が負はされて居ると窺はれる。故に皇道は絶対他力である。此絶対がやがては八百万神としての自覺となるものと考へます。此点は眞宗に似て居る。親鸞上人の歎異鈔の中に

○ 善人尙もて往生を乞ぐ、いわんや悪人をや。

此心理は普通と反對であるが、絶対他力でなければか様なことは申されぬ。之を普通に解釋すれば逆を行くけれ共、信仰が確立すれば其心配はないのである。此點皇道は神話の内容が完全に備はつて居り、且つ教育勅語も賜はつて居ることであるから、其心配はないのである。

○ 彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をば遂くるなりと信して念佛申さんと思ひたつ心の起るとき、即ち攝取不捨の利益にあつけしめ給ふなり。

この攝取不捨といふことを皇道の上に直譯して、神の(まこと)を和魂のみと考へては

ならぬ。神の荒魂は正義のためには断然決行されるのであります。

○ 慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものを憫み悲み育むなり。然れ共思ふが如く助け遂くること極めて難し。また淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて、大慈悲をもて思ふが如く衆生を利益するをいふなり。

即ち自力の慈悲は徹底せぬが利益するといふ目的のために和魂の外荒魂も幸魂もあるのたご解します。

○ 念佛は行者のために非行非善なり。吾計らいにて行するに非れば非行といふ。計らいにてつくる善に非れば非善といふ。ひとへに他力にして自力を離れたる故に行者のためには非行非善なり。

これ絶対の心境でありまして、皇道の忠孝一如もかくの如くであります。

○ 煩惱具足の身を以てすでに證をひらくといふこと、これもての外に候。ごありますけれ共皇道は心を鏡として、始めから信仰をもたしてあるから、本然の姿を悟らねばならぬ。兎に角人間が個人として偉くなると無神論になりやすい。勿論學問修業を積んでえらくならねばならぬことであるけれ共、自分の人格といふものに執

著が起つて來れば、神が不要になるのである。親鸞上人は自ら愚禿と稱せられ、親鸞は弟子一人も有たすと申され同行同朋主義であらせられたることは、實に尊とい御心の内であります。要するに外來思想の人格論は日本の國体原理に反するのであつて、皇道信仰は正に思想の立て直してあります。

次に佛教は自分の心を細かに研究するのが建前で、色々むつかしい説明がある。即ち下界のことを詳細に盡されたものであるが、神話は上界のことをくはしく述へられて居る點から考へて見ると、全然著眼点が相違して居つて、一方は成佛によつて樂土を建設し、一方は天下りによつて中ッ國が建設されるのであります。故に佛教は個人が基調であり皇道は民族が基調である。そこで佛教は死後の國が目標となり、皇道は生れて來た現在が目標になつて居る。故に死後のことについては少しも説かれて居ない。人間が老后になればお寺參りを始めるが、生れたときは神詣りをして居る。面白い對照である。

次に釋尊御入滅のときの有様は沙羅双樹の下で、夕日を御覽になりつつ多くの佛弟子たちに守られ乍ら、安らかにお眠り遊ばされた。然るに天孫の御降臨は高天原の神々が打ち揃ひ三種の神器を捧持して、威風堂々日向の高千穂に御下り遊ばされます。而して猿田彦神が此地上にお待ち申して御案内申上げる。其とき鈿女命は胸を顯はに出して交渉に當られます。即ち虚心坦懐である。卒直なる態度であります。鈿女命は天岩戸開きのときも胸乳をかき出で、裳緒をほどに忍し垂れき。かれ高天原ゆすりて八百万神共に笑ひき。ごありまして心情の内が青天白日であるから八百万神の共同の笑ひとなつたのである。佛教は凡惱具足といひ、女は五障三從と申される。然るに神話はか様に日本女性の明朗を物語られてあつて、日本精神の端緒が大いに違つて居る。故に淨土も中ッ國も全し中道の國なれ共、かくの如く建設の事情が違ふのであつて、全し絶對他力でも眞宗と神話と一致し難い点がある。蓮如上人の御文には、さればれの人も後生の一大事を心にかけて阿彌陀佛を深く頼みまゐらせて念佛申すへきものなり。ごありまして極樂に往生する信心を單純に解すれば、其參上りは足を地に付けた儘脊伸ひの如きものであつて、恰も久延比古の笠をとつて足を付けた様になる。皇道信仰の參上りは民族生命を基調とした國家生活に忠孝一如があり、然る後私生活に天下りがあつて、そこに孝以下友和信恭儉博愛等、教育勅語を御下し給はれたる道

徳が存して中ツ國となる。故に眞宗は絶対他力のよふなれ共、之を追ひつめて見れば自力に歸る。眞の絶対は皇道以外にはないと思はれる。即ち心を鏡として研磨する處に本當の信仰が生れ眞神が出現し給ふ。故に嚴正なる意味に於て、自力の信心他力の信仰と申すへき譯合で、眞理と信仰とは全時であり、又道と神とが全時であつて然かも互ひに日本精神の因數をなすものである。かゝの如く信仰の上で神と佛とは出發点か違つて居る故に、佛教に大なる貢獻ありとしても、眞理に二つなしといふ一足飛びの結論で日本を佛教國の如く斷定することは、國體原理に對して如何なものであろふか。次に眞宗聖典に諸神本懷集があつて、之に曰く 諸神の本懷をあかして佛法を行し念佛を修すへき趣きを知らしめむと思ふとあり。

一 それ佛陀は神明の本地、神明は佛陀の垂迹なり。

二 諸冊の二神、國の内に主なからんやとて御子をもうけ給へり。日神月神これなり。日神といふは天照大神、月神といふは素尊なり。

三 天照大神は日天子、觀音の垂迹なり。素尊は月天子、勢至の垂迹なり。この二菩薩は彌陀如來の悲智の二門なれば、この兩社専ら彌陀如來の分身なり。この兩社

既に然かなり。以下の諸社また彌陀の善巧方便にあらずといふことあるへからず
四 天照大神をば日本國の主となし奉り給ふ。今の伊勢大神宮これなり。素尊をば日本國の神の親となし奉り給ふ。これ神明の吾國に跡を垂れ給ひし始めなり。
五 そもそも吾朝の神明の本地を尋ぬるに多くは釋迦彌陀藥師彌勒觀音勢至普賢文殊地藏龍樹等なり。この諸菩薩の殊に彌陀を念せよと教へ、ひとへに西方の往生をすすめ給ふ。

六 そのさまざまに異なれ共、みな彌陀一佛の智慧に收まらずといふことなし。かるか故に彌陀に歸し奉れば、もろもろの菩薩に歸し奉ることはりなり。このことはりあるが故に、其垂迹なる神明には別して仕ふまつらね共、おのつからこれに歸する道理なり。

親鸞上人の歡異鈔に曰く

七 念佛者は無碍の一道なり。そのいはれ如何となれば、信心の行者には天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし。

蓮如上人の御文に曰く

八 一切の神明と申すは、本地は佛菩薩の變化にましませ共、此界の衆生をみるに佛菩薩に近付難く思ふ間、神明の方便に假に神と現はれ、衆生に縁を結びて其力を以て便りとして、佛法にすすめ入れむが爲めなり。

以上の如く眞宗は吾國の神明に對して、甚た過つた考へをもつて居たのである。之は眞宗のみではないと想像される。皇道より見れば佛教か方便であつて主客顛倒したるもので、神明をかく迄に誤認したる思想を一掃すべく、内容の是正に努むる責任がある。要するに日神月神など文字通りに見るから間違ひを生ずる。勿論太陽は宇宙の一部分である。然し皇道は左よふな偶像崇拜ではない。けれ共佛の木像や画像を拜むよりも遙かに崇高にして、所以なきにあらず、日本民族の天地自然に對する感謝に外ならぬ。法華經の虚空會には東方世界より多寶佛來るとあります。彌陀は西方の樂土とある故、或は天照大神の御化身ではないかといひたくなる。要は皇道の眞底を明らかにすることか國體明徴の本義たるべく、あらゆる方面の妄を開かねばならぬ。

四 結 論

皇道は宗教的のものになつてはならぬといふのが一般の意向である。勿論あらゆる宗教に超越したる点から考へて、其比に非ざることに相違ないけれ共、宗教的といふ觀念の如何にあることではなかるふか。從來佛又は如來といふことばに對しては親しみがあつたが、神に對する信仰は其崇拜が稍ともすれば敬遠に偏し、神社以外には神がお在しませぬかの如き考へをもつたよふである。然るに日本神話の精神にふれて見ると、日本の神様は吾人にとり眞に魂の親様であり、嚴父の如く慈母の如く、あらゆる方面に備はらせ給ふて、吾人の上に御心をつくされ、常にお育てに預つて居る處の有難い神であられる。即ち皇道は眞理と信仰を兩面としたる只一本の道にして、自分の身に喰付いたものである。故に神乍らなる使命の自覺に外ならぬと考へます。

皇道が宗教的であつてはならぬといふことは、つまり宗教か完全でないことを意味する。即ち人間救済の具として考へるとき、人間批判の範圍にあり、政策の具となり、信仰が方便のものとなる。故にあらゆる宗教に各派各宗それぞれが、眞理の極致に達

して居ないことを立證するのであつて、宗教の不完全曝露である。此点からいふとき皇道は宗教ではないけれ共、之を日常の道德經濟あらゆる方面から隔離して、只拜む許りのものにして、實生活に縁遠いものにするには如何なものか。皇道信仰は宗教にあらされ共、然も宗教的なる絶対信仰である。尙皇道は神乍らことあけせぬことにしてあるけれ共、いはゆる末法の世に於て、何等の反省なくして肇國の原理が全時に生活原理たることは至難である。習慣的な念佛の口あそび、チユウインガムをかんで居るよふな空念佛や、一時的の感激信仰に類する基礎なきものであつてはならぬ。ことに角神話の精神は佛教の内容と全然相違したものであるから、中世其影響を受けてなり立つたものでなく、純日本思想であつたと信する。聖徳太子は紀元一二六四年十七條の憲法を御發布遊はされ、佛教特に法華經を中心となされたるを以て、日本を佛教國の如く解し、神明を一段引き下して全等に見做されやすけれ共、引續き一二六七年には敬神の詔を喚發なされてあることに照し合して見れば、太子は佛教を方便に御採用になつたものと窺ふことができます。そして其後百年を経て古事記が編纂されてあつたことは、神話の傳説が埋没されることを予防されてあつたと考へられる。

尙釋尊は神武天皇御即位后約百年、印度に御誕生になつて、八十年の御生涯を佛の教につくされたるもので、天孫御降臨の年代に比較すべきものでない程、新しい故に神と佛とは別個の流れであつたと考へねばならぬ。然し佛教も日本のものになつて其資する處大なりと雖も、然かも神話が一つの物語りとして内容の價値を看過されやすいことは、將來のために重大問題で、御皇威が益々海外に光被する遠心的神業に伴ふて、國體明徴は眞に徹底を要する、あらゆる方面の根本義なりと信します。私は以上の反省を告白して大方の御教示を仰ぎたく、更に權威ある方面に於て、神國本來の正しき道の正しき普及に力を致されむことを切に望みて止まざる處であります。

昭和十三年二月十日 五日印刷
昭和十三年二月二十五日發行

發行 者 宮崎縣高千穂町大字三田井
甲 斐 勝 美

印刷 者 宮崎縣延岡市高千穂通二丁目
甲 斐 せ つ

印刷 所 宮崎縣延岡市高千穂通二丁目
星 印 刷 所

終

9
7
1